

主 題：主を疑うことの罪

聖書箇所：ヤコブの手紙 1章5－8節

「試練を喜びなさい」、これがヤコブのメッセージでした。ヤコブはエルサレム教会の代表として、クリスチャンたちが迫害に怯むことなくますます忠実に歩み続けることを願って、彼らにこの慰めと励ましのメッセージを与えたのです。現在、試練の中にいるクリスチャンに対して、ヤコブはその試練を喜ぶようにと勧めました。しかも彼は、それをこの上もない喜びと思いなさいと教えたのです。100%の喜びをもって、どんな疑いも不満も失望も捨てて、心の底から100%主に感謝し喜びなさいと。非常に難しいことを神は私たちに要求されると、確かに私たちはそのように思うのですが、しかし、神はそれが可能であることを私たちに教えるのです。どうすればそれが可能なのか、それはもうすでに見てきたことです。私たちがどんなときにもその試練を喜んで行くためには、その試練の目的をしっかりと覚えることが必要です。あなたの信仰が成長するために神が試練を与えてくださっているのです。そのことをしっかりと覚えなければなりません。あなたを愛する神は、あなたに必要な試練の機会を与えてくださっています。同時に、私たちはその目的を覚えることだけでなく、主のみことばに常に立つことです。主の約束を覚えることです。それが私たちの信仰を強固なものにします。感情に頼った信仰は必ずぐらつきませんが、みことばに立った信仰はどのようなことがあっても揺らぐことはありません。

私たちが主に忠実に生きて行こうとすると、私たちの生活にはいろいろなことが起こってきますが、それらの問題から逃避するのではなく、その中にあっても恐れることなく、主を信頼して歩み続けて行く、そのような忍耐をもった信仰者へと私たちは変えられて行くのです。物事が難しくなっても、その中にあって進み続けて行く力を神は私たちに与えてくださるのです。パウロはローマ人への手紙5章でこのように言っています。**「3そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、4忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」**、パウロはよく分かっていたのです。いろいろな試練が自分を成長させて行くのだと。ですから、彼は様々な試練に出会ったときに決して逃げようとはしなかったのです。その中でしっかり主を見上げて、忍耐をもって歩み続けたのです。そして、それが彼の信仰への大きな助けとなったのです。

試練によって私たちは成長して行きます。ヤコブが教えたように私たちは成長を遂げた完全な者となって行くのです。4節で教えている通りです。**「その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」**と。すなわち、主のみこころに忠実に従い、主を喜ばせることをいつも選択するような人へと神は私たちを変えようとしてくださるのです。私たちの日々の生活にはいろいろなことが起こります。試練は間違いなく日々私たちに訪れます。その中で私たちは、何が神の前に正しいのか、神のみこころはいったい何なのか、それを考え実践して行く人、つまり、霊的に成長している人、そのような人に神は私たちを変えようとしておられるのです。ですから、忍耐を持って主を信頼して歩み続けなさいと、ヤコブは教えたのです。

そのヤコブが続けて私たちにこのように言います。私たちが成長を遂げた完全な者になって行くためには知恵が必要だと、5節から教えています。というのは、確かに、私たちが試練に会うとき「これは自分を訓練するためなのだ」と神の約束を覚えながらも、心の中では葛藤が起こります。「なぜ私はこんな苦しみを味わうのだろうか？」と、そのような思いを持つのです。ですから、私たちには知恵が必要だとヤコブは教えるのです。5節には**「あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、その人は、だれにでも惜しげなく、とがめることなくお与えになる神に願いなさい。そうすればきっと与えられます。」**とあり、私たちが問題や試練に打ち勝つために必要なのは神からの知恵だと、ヤコブは教えます。

「知恵」ということばを広辞苑で見ると「物事をよく考え計画し処理して行く力」とあります。聖書的にこの「知恵」ということばを見たとき「正しく判断することのできる力」とあります。どういう意味でしょう？「すべてのことにおいて、あらゆる状況において、神のみこころに沿った選択をする能力」、これが知恵です。どのような問題が訪れようと、知恵ある人はその中にあって、何が神の前に正しいのか、何が神のみこころなのか、そのことをしっかり判断して、そのみこころに従って行くことができ、みこころに沿った選択をすることができるのです。私たちにとってこの知恵というのは非常に大切です。神は目的をもって私たちに試練を与えます。それなら、神が備えてくださるその学ぶべきことを私たちはしっかり学ぶことが必要なのです。神が与えてくださるレッスンを無駄にしないために「知恵」が必要なのです。試練の中にあってどうすれば神の栄光を現わすことができるのでしょうか？どのような行動をとって行けば良いのか、どのように語れば良いのか、どのように対応することが神の前に正しいのかを知るためには知恵がいるというのです。そのことの大切さを知っていたヤコブは、迫害の中にいるクリスチャンたちに、そして今の私たちにもそのように教えるのです。

さて、この知恵について私たちはもう少し考えて行きます。「知恵」について語っている最も知恵のあった人物、最高の賢者と言われているイスラエル3代目の王、ソロモンのことばを見ましょう。箴言1：7に「**主を恐れることは知識の初めである。**」と記されています。同じ箴言の9：10を見ると「**主を恐れることは知恵の初め、**」とあります。知識と知恵、非常に関連したものです。賢い者、知恵のある者はどのような人か、ソロモンが教えています。本当に賢い人は主を恐れる人であると言います。主を心からかしこみ、畏れる人です。畏敬の念をもって心から神を敬っている人、それが賢い人で、そのスタート地点は神についての知識をもつこと、つまり、神を知ることであり、神を信じることから始まって行くのです。神が教える賢い者とこの世がいう賢者とはまったく異なります。この世はその人のIQや学歴を指すかもしれませんが、神が言われる本当に知恵のある人とは、主を信じ主を恐れ主に従っている人です。ですから、パウロはIコリント1：20でこのように言っています。「**知者はどこにいますか。学者はどこにいますか。この世の議論家はどこにいますか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。**」と。どんなにすばらしい学歴をもっている神を知らなければ、神はその人に対して愚かであると言われるのです。箴言14：12には「**人の目にはまっすぐに見える道がある。その道の終わりは死の道である。**」とあります。人間は生まれながらに自分のやりたいことをしたい、自分の好きなように生きて行きたいのです。そのような生き方をしていると言います。そして、神がいろいろな方法で私たちに、肝心なことを忘れていきますよ、肝心なことはあなたを造りすべてのものを創造されたまことの神を信じることだと示してくださるのに、私たちはその神の恵みのみわざに対してNOと言い続けているのです。神は警告されます。快楽を追求して行くなその道の終わりは死であると。さばきがあるということです。人は皆多かれ少なかれこのことを感じています。自分の欲のままに、快楽のままに生きて行くな必ず何かがあると。神のさばきがあるに違いないと、しかし、それを認めたくないのです。その神を離れた生き方がいかに空しいものであったか、私たちは神を信じたときに気付きます。ローマ人への手紙6：21にはこのように書かれています。「**その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。**」、イエスを信じて初めて気付いたのです。何と愚かな生き方をしてきたのかと。ですから、多くの人はこう言います。「もっと早く、もっと若いときにイエスさまを信じていたらよかったのに…、無駄な人生を過ごすことが短いから」と。

ソロモンが箴言の中で愚か者とはこういう人だと教えています。見てゆきましょう。

1：7b「**…愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。**」、愚か者とは横柄であり傲慢で神も知恵も拒んで受け入れようとしません。そして、ここで使われている「愚か者」ということばは箴言の中に19回出てきます。箴言以外にも7回使われています。

12：15「**愚か者は自分の道を正しいと思う。しかし知恵のある者は忠告を聞き入れる。**」、頑なで自分は正

しいと信じきっているから、人の忠告を聞き入れようとしないのです。賢い人は忠告を聞き入れます。

12:16 **「愚か者は自分の怒りをすぐ現わす。利口な者ははずかしめを受けても黙っている。」**、心が頑なで人の話を聞こうとしないから、責められたりすると怒りをもつのです。短気で怒りやすい、語られていることを考えようとしめない、聞く耳を持たないからすぐに怒りをもって応答するのです。利口な者は黙っている、それは正しい対応をしようと祈っているのです。そして、怒る人を赦そうとします。何が主の前に正しいのかを考えそれを為す人、それが賢い人です。

14:3 **「愚か者の口には誇りの若枝がある。知恵のある者のくちびるは身を守る。」**、若枝は短くまだ完全に成長していません。愚か者の心の中にはプライドが満ちているのです。自慢したくて仕方がないので。賢い者はそのようなことをしません。

14:9 **「罪過のためのいけにえは愚か者をあざけり、正しい者の間には恩恵がある。」**、愚か者は正しいことを受け入れようとしないのです。

15:5 **「愚か者は自分の父の訓戒を侮る。叱責を大事にする者は利口になる。」**、愚か者は不従順です。父の与える教えに耳を傾けないのです。特に神のことについて語られる教えに頑なであるゆえに聞こうとしないのです。賢い者は訓戒を受け入れます。

20:3 **「争いを避けることは人の誉れ、愚か者はみな争いを引き起こす。」**、愚かな者は争いやもめごとを引き起こすと言います。

27:22 **「愚か者を臼に入れ、きねでこれを麦といっしょについても、その愚かさは彼から離れない。」**、手に負えない状態です。善導できないのです。教え諭して良い方向に導くことができないのです。それほどその心が閉ざされているのです。

ソロモンは箴言の中で「愚か者」と日本語に訳されているこのことばに、三つのヘブライ語を使っています。一つは今説明した「横柄で傲慢で神も知恵も受け入れない」ということばです。これまで見てきたのはすべてこのことばです。別のヘブライ語は「心が閉ざされている」人に使われることばです。箴言の中に約49回出てきます。もう一つのことばは「道徳的に鈍い」また「神に対して非礼な態度を取る」人に対して使われています。箴言に3回出てきます。みな共通しています。神に対して心開かないのです。このような人々をソロモンは「愚か者」だと言うのです。どんなに教育を積んでいても神を知らない人たち、神に心を開かない人たち、神の教えに耳を傾けない人たちは「愚か」だと言います。

ヤコブも「愚か者」と「賢い者」について3章でこのように教えています。3:13-17 **「あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔和な行ないを、良い生き方によって示しなさい。:14 しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。:15 そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。:16 ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。:17 しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。」**。このみことばの中でヤコブは二つの対応、二つの選択を教えています。一つは人に対して**「苦いねたみと敵対心」**をもつという選択です。いろいろなことがあって人に対してねたみを持ったり敵対心を持つような状況にあったかもしれませんが、そのときに選択が生まれたのです。**「苦いねたみと敵対心」**をもってしまうことは止むを得ないこととしても、そのように選択するのはその人が「愚か」だということを明らかにするということです。15節に**「そのような知恵は」**とあります。そのような選択に至らせた知恵というものは実は神からのものではなくて、この地に属し、肉に属し、悪霊に属するもので、いかにそれが間違っただけであるか、神のみこころに全く相反するものであるとヤコブは言っているのです。私たちクリスチャンは日々いろいろなことを経験します。人間関係の難しい問題にぶつかるでしょう。そのときに彼らがこう言ったから私も仕返しをとというのは愚かな証拠だということです。そのような選択を神は喜ばれない、だから、次にこのよ

うにあります。人に対して「**純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないもの**」とこのような人は知恵をもっている人だと言います。人の悪に対して悪で報いないのです。相手がどんな人でも正しく接する人です。そのような正しい選択をするのはそれが神のみこころだからです。私たちがどのように思いどのようにするかではなく、神のみこころが何であり、神を喜ばせるにはどうすればいいのかを考えてそれを選択できる人が、霊的に成長した人であり、賢い人だとみことばは教えるのです。その人の生き方がその人の知恵を明らかにするのです。何が正しくて何が間違っているのかはみことばが私たちに教えてくれます。それを実践して行くことです。

主を信じて主を畏れる生き方をスタートさせたクリスチャンが、ますます主を知って行くことによってその生き方が変わってきます。なぜなら、神を知れば知るほど私たちは神にふさわしい敬意を現わそうと変わって行くからです。主を畏れる人はいつも主のことを思っているのです。ダビデはこのように言います。詩篇 16：8「**私はいつも、私の前に主を置いた。主が私の右におられるので、私はゆるぐことがない。**」。ダビデはいつも神の臨在を覚えたのです。主の臨在の中に生かされていると。私たちは神から離れてどこに隠れることもできません。主の目が常に自分に注がれていることを覚えて生きる人は、自ずから自分の言動、心を吟味して慎んで行き、それがいつも神のみこころに沿ったものとなることを心がけて生きるのです。神はそのような生き方を私たちに望んでおられるのです。

私たちはそのような生き方をしているでしょうか？神の助けが必要です。私たちはみな、知恵に欠けた者だからです。5節の後半を見ると「**神に願いなさい。**」とあります。このようにヤコブは命じているのです。神に知恵を求めて行くことが必要なのです。そして、知恵を得た人には神はすばらしい祝福を約束しています。箴言 3：13を見ましょう。「**幸いなことよ。知恵を見いだす人、英知をいただく人は。**」、神が知恵をもって生きる人に約束されていることは、幸せを与えるという祝福です。そして、ソロモンは言います。その幸せとはどんなものか 14節以降を見てください。「**14 その儲けは銀の儲けにまさり、その収穫は黄金にまさるからだ。15 知恵は真珠よりも尊く、あなたの望むどんなものも、これとは比べられない。**」と、神が与えてくださる幸せというのは、たとえ高価な金や銀をもってしても得ることのできないすばらしいものだと言うのです。どのような幸せ、祝福が約束されているのでしょうか？「**16 その右の手には長寿があり、**」と、長寿が約束されています。私たちクリスチャンは神を見上げて生きて行くなら、どのような問題があっても大いなる喜びに満たされるのです。私たちは天国の祝福を今いただきながら生きて行くことができるのです。このような人生を神は約束してくださっているのです。神を知らないで悩み苦しんでいる人々の中であって、私たちには希望が与えられ、本当の喜びと感謝に満たされて生きて行けるのです。ソロモンが語る祝福、二つ目は「**その左の手には富と誉れがある。**」と満足が与えられます。満ち足りた人生を神は歩ませてくださるのです。三つ目は「**17 その道は楽しい道であり、**」、その人に喜びを与えてくださるのです。四つ目は「**その通り道はみな平安である。**」と神が平安をくださるのです。そして「**18 知恵は、これを堅く握る者にはいのちの木である。これをつかんでいる者は幸いである。**」と、知恵によってその人は神からの幸せをいただくことが約束されているのです。だから私たちは知恵を求めるのです。私たちがこの地上を幸せに歩むことによって、その幸せをくださっている神の栄光が現わされるのです。

もう一度、ヤコブ 1 章に戻って、ヤコブはどのようにして知恵を得るのか、その方法を教えてくれています。①自分には知恵が必要だと認めることです。5節に「**あなたがたの中に知恵の欠けた人がいるなら、**」というのは、欠けていない人がいると言っているのではなく、みな欠けているからそれに気付かなければいけないということです。②主に求めることです。5節の後半に「**とがめることなくお与えになる神に願いなさい。**」とあります。箴言 2：6に「**主が知恵を与え、御口を通して知識と英知を与えられるからだ。**」とあり、それは神から来るものです。しかも、ここでヤコブは「**その人は、だれにでも惜しげなく**」と言っています。この副詞は神が無条件で与え続けることを教え、「**とがめることなく**」という動詞は、神が私た

ちの不信仰さや弱さを責められるのではなく、与え続けてくださるということです。「**とがめることなく**」も「**お与えになる**」も現在形で、神は「与える」というわざを止めることがない、継続して与え続けてくださるという意味です。そのようなお方だから私たちはそのお方に求め続けたら良いのだと教えるのです。そして「**そうすればきっと与えられます。**」と必ず与えられると言うのです。私たちは間違いなく知恵をいただくのです。

そのための条件が6－8節に書かれています。「**6 ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。7 そういう人は、主から何かをいただけると思ってはなりません。8 そうするのは、二心のある人で、その歩む道のすべてに安定を欠いた人です。**」。信仰をもって求めることです。つまり、神に対して知恵を与えてくださいというときに、疑いをもって求めてはならない、そういう人は二心のある人だとヤコブは言います。なぜ二心のある人が神に喜ばれないのでしょうか？その人の心の中には、信じる心と信じない不信の心があるのです。風に揺れ動く大波のようにあっちにいたりこっちにいたりして安定を欠いた状態です。二心をもって主の前に立つ人は主を信頼していないことを現わしています。ペテロが湖の上を歩いたこと、マタイ14章に出てきます。28－31節「**すると、ペテロが答えて言った。「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。」29 イエスは「来なさい。」と言われた。そこで、ペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエスのほうに行った。30 ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。31 そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。**」。みなさん、あなたが神の前に立つとき、もしかしたら神は与えてくださらないでは？とそのような疑いの思いをもって立っていないかどうかです。神は与えてくださるのです。信頼をもって神の前に立つことが知恵が与えられる条件です。二心のある人の問題は神への信頼だけでなく、神への愛にも問題があることを証明するのです。Iヨハネ2：15に「**世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。**」とあります。つまり、神を愛していながら他のものを愛するという、二つのものを同時に愛するということは神への愛に問題があるということです。そのような人の祈りを神は聞かれません。本当に主を心から愛しているのなら、そのお方を信頼して任せることです。

ヤコブが今日私たちに教えてくれたこと、私たちは弱い存在です。試練の機会を無駄に過ごしてしまうことの多い者です。だから、神の前に知恵を求め続けて生きることが大切なのです。それによって、主が与えてくださる学びの機会を無駄にすることがないのです。私たちは、この問題、苦しみ悲しみの中で私が学ばなければならないことをしっかり学べるように、神さま、私に知恵を与えてくださいと祈ることが度々あります。このことをヤコブは言っているのです。神が与えてくださるレッスンをしっかり学ぶこと、そのために知恵が必要であると知ること、そして、神の助けを求めるのです。このプロセスによって私たちは変えられて行きます。すべての試練は学びの機会です。しっかりと学ぶことです。